

娘の交際相手がフリーターだったら？

夫が「6ヶ月給料が入ってこない」と言ったら？

正規の職業に就いてないと男性は結婚もできない？



基調講演：男性の働く意識・子育ての意識

講師

大槻 奈巳 (おおつき なみ)さん

聖心女子大学准教授。

専門は職業社会学、労働とジェンダー。

女性と男性の働き方やキャリア形成における格差を社会構造から研究している。



イラスト／前掲書より転載



イラスト／前掲書より転載

Nami OTSUKI

稼ぎ手から降りられない男性たち

今、働き方が二極化していると言われます。正社員は安定した地位があっても、長時間働いて自分の時間を持ってない状態と、また非正規雇用はいつ首を切られるかわからない上に給料が安いという、正社員も非正規雇用も大変な状況の働き方です。そのような状況の中で、男性の働く意識を見ると、日本的雇用システム(年功序列・終身雇用)が崩れてきた今も、まだまだ性別役割分業意識が強く、離職・転職などすごく大変な状況を経験しても、あくまで自分が生活費の稼ぎ手であると強く考えています。むしろ、雇用が不安定だと考えている男性の方が、稼ぎ手であることを重要視しており、専業主婦の9割、共働きの女性の8割もそうであることを強く期待しています。

また、雇用が不安定で結婚できない、子どもを産みたいのに産めないという状況の問題がありますが、男女ともに出産後も女性は働き続けた方がいいという考えに大きく変化してきているにもかかわらず、「稼ぎ手は男性」という意識に影響を与えていません。男性はその状況から降りられないのです。

子育てしたいと悩み始めた父親たち

父親が一生懸命、長時間働いてくれている結果、子どもとの接触時間が短いために、しつけに不参加だったり、子どもに甘かったりして、母親に負担がはいっています。しかし、そのことに4割の父親は、平気であるわけではありません。日本のお父さんは、仕事と家庭の両立志向でありながら、身動きできない状況にあると言えます。東さん(P3参照)のように、人生が変わるほどの育児の楽しさや喜びを経験しないまま過ごしてしまっているわけです。

働き方を変えていこう

やはり、社会全体で男性の働き方を見直して、そのあり方を変えていかなければ、状況は変わっていかないと考えます。それには、男性だけでなく、女性の協力・バックアップが必要です。男性だけが大変なまま働き続けた結果、企業での優位なポジションを男性が占め、女性はそのような地位に就けないという悪循環があります。それを断ち切るためにも、皆さん一人ひとりがワーク・ライフ・バランスについて考え、社会は自分たちで変えていけるんだと思っていただければ、大変ありがたいです。

フリートーク：男性も女性もワーク・ライフ・バランス

渡辺 私は家族社会学が専門ですので、家族と社会の構造を見ます。

「ワーク・ライフ・バランス」というのは、父親が家事・育児をしようという唯一の領域ではなくて、我々の生きる社会と生活全体との関係つまり構造を考えようということじゃないかと思います。

例えば、父親や母親が子育ての場面で社会参加した時に、母親は世話をする人で、父親は支配するという家庭の性別役割分業が再現され、そこでまた子どもたちが、男女の役割を学習するという構造一。そういう社会の常識の構造をなかなか変えられないけど、小さな行動

の変化とともに意識を変化させていくことが大事だし、多様な家族のあり方を容認する社会ということではないでしょうか。

しかし、少しでも人と違ったことをすると孤独だし、孤立するので、仲間を作りコミュニケーションを取りながら、ネットワークを作ることが必要です。「ワーク・ライフ・バランス」のバランスを取る力、コーディネイトする能力を持って家族を築いてほしいと思います。

大槻 職業社会学という立場で見ると、会社というのは、男性が中心で重要なポストを占め、女性は将来的に見込みのない仕事を割り当てられて男性の周辺にいる

Hideki WATANABE

講師

渡辺 秀樹 (わたなべ ひでき)さん

慶應義塾大学文学部教授。

専門は家族社会学。

変動する社会の中で家族はどう変わってゆくか、変わる社会、変わる家族の中で我々の人生はどう変容するか等を研究している。

コーディネーター

藤野 美都子 (ふじの みつこ)さん

福島県立医科大学医学部教授。

専門は、社会保障法・憲法。

社会保障制度と女性のライフスタイル、患者の権利、二院制などを主に研究している。

平成21年4月より、本市男女共同参画推進アドバイザーに就任。



イラスト／前掲書より転載

人ということでやってきました。周回的に働きながら、かつ家事・育児も女性の仕事とされてきて、「この状況おかしいよ」と女性は先に声をあげたわけです。だから男性も「残業代がないと生活が成り立たないようなこの働き方は、おかしいんじゃないか」と声をあげる必要があると思います。みんなが楽しく働き、楽しく生活できる社会を作っていくためには、私たち一人ひとりが、「子育ては母親でしょ」「稼ぎ手は父親でしょ」という意識を少し変え、働き方を変えることだと思います。

藤野 男性も女性も、「ワーク・ライフ・バランス」という現在、働きたいと思っている女性にはプロとして社会全体に評価してほしいという課題があります。男性も子育てに関わることがほとんどできない状況の中で、少しでも関わるができるように、皆で少しずつ家事や育児や介護もやり、自分自身を高める時間を持つことが大事です。そのための目標として掲げられているのが、「ワーク・ライフ・バランス」であり、皆さんも自分にとってどのようなバランスで生活していくのが良いのかということは今一度考えていただければと思っております。